

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

竹富島方言の a /? について

著者	ローレンス ウェイン
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	23
ページ	165-179
発行年	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/11910

竹富島方言の a/ə について

ウエイン・ローレンス

1. はじめに

竹富島方言における [ə] の音について、國學院大學日本文化研究所 (1990) は次のように述べている。

/a/は、竹富島方言の音韻におけるもっとも大きな問題の一つを含むと言える。それは、共通語のア行に対応する拍に二通りの発音が観察されるからである。それらはおおむね [a] と [ə] のように表記される母音を持つのであるが、これら 2 個の母音は同じ音素なのか異なる音素なのか問題なのである。

[a] と [ə] の現われ方は、個人差もあり、対立するとは断言できないが、個人によっては次のような minimal pair を持っている。

[pəi] (南・針・蠅) : [pai] (鉋)

[ssəridura:] (腐っているねえ) : [ssaridura:] (塞がっているねえ)

久野真 (1990: 10)

筆者が調べられた限り、[ə] の存在はごく最近になってから指摘されるようになったようである。宮良 (1980 [1930])、平山ほか (1967)、中本 (1976: 233-5; 1981)、野原 (1986: 409-13)、中松 (1987: 179-217)、名嘉真 (1992: 292-303) はいずれも竹富方言の資料を音声表記で提示しているが、ə はなくて、/a/ はすべて a になっている。古瀬・小島 (1993) では、「馬」の一語だけを /'NNma/ [ʔm:ma] (207, 214頁) にしているが、この論文に、又は続編の古瀬・小島 (1994) にも、これ以上の ə への言及が見られない。

國學院大學日本文化研究所 (1990) は報告者によって a/ə の分布状況が違う。その中の大野 (1990a,b) は音声表記であるが、すべて a である。⁽¹⁾ 久野マリ子 (1990) は、名詞に a と ə の両方があらわれるが、形容詞には一語だけ ə があり (mmasəN おいしい (89頁))、動詞には ə がなく、すべて a になっている。久野真 (1990) は全品詞にわたって ə を報告している。杉村 (1990) には短母音の ə がないが、長母音 ə: が kutuʃə: (今年は) や harə:su:nu (行きはしない) など計四例に現れる。いずれも語幹末の -i に助詞 -a (は) が融合してできた母音である。この ə: は久野や古瀬・小島の ə と異質のものであって、おもしろい問題ではあるが、これ以上のデータがないので、本稿では扱わないことにする。⁽²⁾

辻 (1991) (次節で詳しく取り上げる) も a と ə を区別しているが、この文献で注意を引くのは ə の多いことである。久野眞 (1990) と辻 (1991) での a 対 ə の現れる頻度を比較すると(1)のような割合になる。⁽³⁾

(1)

	a	ə	ã	a:	ã:	aã	ə:	ã:
久野眞 (1990)	47.5%	38.8%	0.2%	7.6%	4.5%	0.2%	0.6%	0.6%
	a	ə		a:	a:a		ə:	ə:ə
辻 (1991)	17.2%	73.4%		7.0%	1.0%		0.6%	0.6%

長母音の場合は大差ないが、久野眞 (1990) では短母音 a が ə より1.2倍多いのに対して、辻 (1991) では逆に ə が a より 4 倍以上も多い。

本稿では、三人の話者の ə と a の実態を検討し、歴史的な成立と、共時的な音韻分析について考察する。第2節では、辻 (1991) における a/ə の分布を検討して、通時的な説明を試みる。第3節では、一人のインフォーマントの聞き取り調査に基づいて、音響音声学的な分析を添えて、a/ə の実際の発音について報告する。第4節では、ə が音素として成立するかどうかという問題を取り上げ、共時論的分析を提案する。

2. 『方言集』

2.1 表記

辻 (1991) (以下『方言集』) は4000語余りの語彙集で、著者自身の言葉を集めたもので、一個人の言語資料である。見出しは平仮名書きに、当時八重山高校の英語の教諭高嶺方祐氏が音声表記を加えたものである。音声表記は日本語のローマ字表記で普通使われる22の字母に ə と長音符の : を加えたものである。アクセントと鼻母音化は示されていない。⁽⁴⁾ ひらがな表記形では ə と a は書き分けられていないが、音声表記は、間違いと思われるわずかな語例を除いて、ə も a の区別が一貫してなされている。

この節で掲げる竹富島方言形は、特にことわらない限り、『方言集』に載っている語形であるが、表記はインフォーマントの発音を表わしている音声表記であり、意味もインフォーマントが説明して下さった意味に統一している。

2.2 分布

『方言集』にあらわれる [a] と [ə] で意味が区別される最少対を参考に、竹富島坡座間出身・在住の河上親雄 (大正3年生まれ) から得られたものをすべて挙げると(2)になる。

(2)

[ə]	[a]
ai 口蓋、藍、蟻	ai 東

kəi 粥、衣装入れ	kai 替わり
məi 米、蒔く	mai お茶碗
pəi 南、蠅、灰、針、吐く、這う	pai 鍬
kətə ばった	kəta 陰
həisə 早く	haisə 明るい
kubəsə 不器用	kubasə 浦葵の葉で造った笠
nərəʃi 衣類かけ	nəraʃi 教えなさい
pinəri 減少して	pinari 引潮で船がのし上がる
gə:rəʃə(相手の不幸に対して)悲しみ	ga:raʃə:(子供の遊び道具の)輪
ssəridura 腐敗している	ssaridura ぶら下がっている、ふさがっている
ʃʃəririja 事情を話さない	ʃʃaritta すり減った

ここでも [ə] が多く ([a] の13語に対して、[ə] は21語)、周辺の方言の a に対応している。⁽⁵⁾ 一方、[a] の方は周辺方言の a: や aka に対応しているから、(3) のような通時的な派生が考えられる。⁽⁶⁾

(3) ai < *aari < *agari

石、新、波 aarĩ、与 agai
 kai < *kaari
 鳩 kaaru
 mai < *maari < *makari
 鳩 makaru、新 maharĩ
 kəta < *kataa < *kataka
 石 katagaa、鳩 kataka、与 kataka
 haisə < haa- < *aha- < *aka-⁽⁷⁾
 haaməmi (赤豆) と比較
 kubasə < *kubaasa < *kubagasa
 石、宮 kubaasa (笠)、鳩 kubagasa、与 kubakasa
 nəraʃi < *naraasi
 石 naraasĩN、鳩 naraasun
 pinari < pii (干瀬、岩礁) -naa (に) *agari
 ssari < *ssaari < *ssagari
 鳩 ssaaruN (塞がる)、与 c'ag- (塞ぐ)
 石、鳩 ssaaruN (ぶら下がる)、与 sasagaruN

ʃaritta < *ssi- (擦り) * -ari- (受身) -tta (過去)

最後の例は、*ssi-の i が母音前で半母音化し、それに伴って隣接の母音が代償長母音化したと考えられる。同じような例に pjangəri (引潮で船が上がった感じ) がある。これは pi (岩礁) angari (əŋgəri 上に上げる) に由来すると思われ、i の半母音化と連動して、a がいったん代償長音化した後、上の他の例と同様、短母音化が起こったのであろう。

(2)にあって、(3)で扱わなかった例に pai (鋏) がある。これは周辺の方言では短母音になっている (鳩 kiipai、石 kiipai (木鋏)、kanipai (金鋏))。宮良 (1980 [1930]) も名嘉真 (1992) も竹富の語形を pai として出し、針や蠅と同音語にしているが、平山ほか(1967)、中本(1976: 234; 1981) は pa:i を挙げている。これは不規則的に長音化した例か、あるいは与那国の /p'agai/ と関係があるかも知れない。

歴史的に下記の二つの変化があったと想定すれば、(2)の分布は説明できる。

a > ə

a: > a

まず、短母音の a が ə に変わった。その後、長母音の a: が短母音化して、a になった。

a: の短母音化はより一般的な短母音化現象の一端であろう。久野マリ子 (1990: 88-9) によれば、共通語の一拍語は竹富方言では、本来二拍に発音されるが、「この長呼化現象はだんだん劣える傾向にあ」り、一拍や、一拍よりやや長く発音されることが多いそうである。久野真 (1990: 48) は [ju~ju~ju:] (湯) の例を挙げている。この短母音化は多音節語にも適用すると思われる。çide (左)、çidegura (左きき)、kənoʃi~kəno:ʃi (潮干狩用具) (鳩 kanoosi)、久野真 (1990: 5) の inokazi (竜巻) (鳩 inookazi) や加治工 (1997: 134) の janangori (濁る) (鳩 janangoorun) などがその例である。決して短くならない長母音もあるようであるが、短母音化は竹富島方言の共時分析に属するといえよう。

以上の分析で、二つの予測が可能になる。一つは、八重山諸方言に一モーラ自立語は本来なかったので、現在の竹富方言に短母音化による Ca があっても、Cə の一モーラ語はないはずである。二つ目の予測は、長母音の a: はないという予想である。最初の予測は当たっている。a (粟)、ʃa (茶)、ta (田)、ta (鷹)、na (名前)、na (釣り糸)、pa (歯)、ja (家) などの Ca の一モーラ語があるが、インフォーマントから Cə の一モーラ語は一つも得られなかったし、『方言集』にも一語も掲載されていない。『方言集』では ə が a より 4 倍も多いことから、これは有意な「すきま」と言えよう。⁽⁸⁾

二つ目の予測は、(4)からわかるように、あたっていない。竹富方言では長母音の a: は決してめずらしくない。

- (4) kə³ərɪtta 飽きた < *kamaritta
 石 kamar(ir)uN (飽きる)
 ə³əsənu 残さない < *amasanu
 鳩 amasanu
 nə:ndə 中途半端 < *namanda
 石、鳩 namanda
 hə:dʒi 髪 < *kamazi
 新 kamazi、鳩 gamazi
 gə:rəʃə 悲しみ < *gamarasa
 石 gamarasa、宮 hamarasa (悲しい)
 kəədotʃi 竈 < *kamaduci
 nə:kki お焦げ < *namasiki
 石 namaciki、鳩 namasiki
 hədʒə:ritta 始まった < *hazimaritta
 石 *hazimarun⁽⁹⁾、新 pazīmaaruN、鳩 pazimarun、与 hadimarun
 juntə:ʃi 動かす < *juntabasi
 石 jutabun (よろめく)、鳩 joottabun (ふらつく)

(4)のə:の多くは*amaに由来する。長いə:になっているために、m-脱落はa>əの後に起こったと考える。すなわち、-ama->-əmə->-ə:の順に変化を遂げたと考えられる。

hədʒə:rittaは*hazimarittaに遡るが、m-脱落のためにCiəという音連続が生じるが、再音節化で二モーラのCiəが代償長音化を経てCjə:になったと思われる。⁽¹⁰⁾

juntə:ʃi(動かす)はjuntəbi(揺れ動く)の他動詞形と思われ、juntab-as-と形態分析される。この語形では、語中の-b-が落ちている。語中の-b-が弱化し、あるいは脱落する例は他にəkui(あくび)<*akubi、kju:ʃi(煙)<*kibusi、ma:i(まね)<*maabiや上勢頭(1976:322)、久野真(1990:8)、辻(1991:226)のΦuniΦu(蜜柑)<*kunibuなどがある。他の例としてsuʔuʃi~subuʃi(膝)、平山ほか(1967:529、531)のhoba:~howa:(だけは)、久野真(1990:19)のsuūru~suburu(頭)、加治工(1997:127)の[ʃikitaŋʔawa~ʃikitaŋʔaba](石油)があつて、これらの例から、b-消失が比較的最近起こった変化であることがわかる。これはjuntə:ʃi(動かす)の長いə:と符合する。b-消失はa>əより後に起こった変化でなければならない。又、b-消失はjuntə:siの共時的派生の一部であつて、suūru~suburu(頭)のようなゆれがあることから、b-消失は現代語の共時態に属すると言える。

同様に、インフォーマントから得られたə³əsunə~əməsunə(残すな)や諸文献に散見する

m-消失のゆれの例(5)から、m-消失も現在進行中の変化であると考えられる。

(5) 久野真 (1990:19)

[juũndura] ~ [jumundura] (読むよ)

[ʃuũ] ~ [ʃumu] (心)

加治工 (1997:123、132)

[ʔamadari] ~ [ʔaʔdari] (しずく)

[Φ̥ɯkamabuʃi] ~ [Φ̥ɯkaʔbuʃi] (宵の明星)

加治工 (1998:148)

[jaʔtukuʃa] ~ [jumatukuʃa] (ごきぶり)

竹富島方言について加治工 (1996:22) は、「鼻音の素性は、いわば分節音素/m/の一時的に変身した仮の姿である。異音と認められる……」と判断している(加治工1995も同様に論じている)。つまり、鼻母音化を経た m-消失は竹富方言の共時音韻論の一部である。

以上の考察から、次の音変化が再建できる。

-k-/g->ϕ

短母音 a>ə

a:→a

-m-/b->ϕ

このうちの短母音化と-m-/b-脱落は今でも起こっている変化である。

3. 音響音声学的考察

以上の考察は文字資料に基づくものであるが、ə の実際の発音はどのようなものであろうか。個人差があるに相違ないが、本節では一人の話者の発音について報告する。河上親雄氏の面接調査の際に録音した発音を音響分析ソフト『CECILv1.1B』⁽¹¹⁾ にかけて、母音の音質ならびに音量を測定し、その結果を掲げる。

竹富島方言の第一フォルマント周波数(F1)と、第二フォルマントと第一フォルマントの差(F2-F1)を平面図に示すと図1になる。⁽¹²⁾

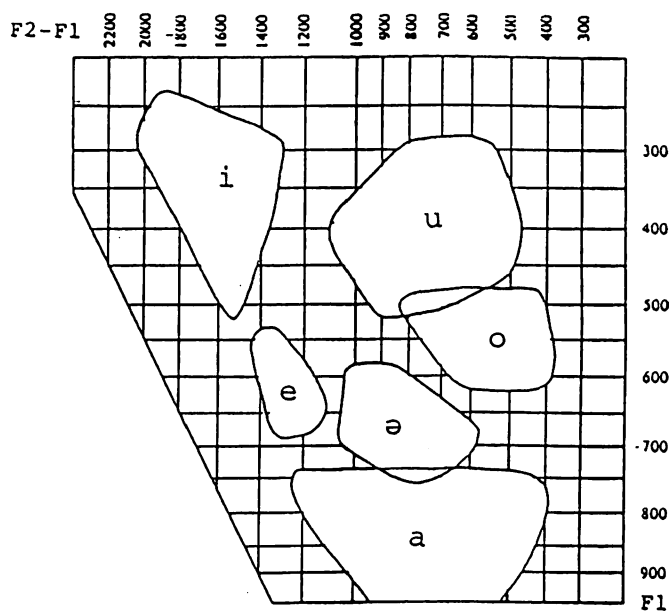


図1 竹富島方言の母音のスペクトル分析

図1から、[a] が [+低舌性] の素性を有していると推察できる。一方、[ə] は [a] より高く、あるいは中央寄りである。[ə] は調音的に中性 (neutral) (服部1951: 163) 的な位置を占めていると見られる。これの証拠となるデータに、図1の作製に使われていない nə:ndəri:kə:ndəri:ji (中途半端に) という語形(6)がある。

(6)	[n	ə:	nd	ə	r	i	k	ə:	nd	ə	r	i	{	i	}
F1			650		600		400		650		550		300			400Hz
F2			1450		1700		2100		1650		1750		2000			2000Hz
F2-F1			800		1100		1700		1000		1200		1700			1600Hz

(6)の中の二つのə:は図1のəの範囲内に収まるが、次音節のəは領域外になっており、二つともə:とiの中間に位置している(図2)。これは、ə(:)に典型的な発音がある(舌の休み状態の位置であろうか)としても、フォルマントの厳とした目標値はなく、前後の母音に作用されやすい性質の母音であることを示唆する。

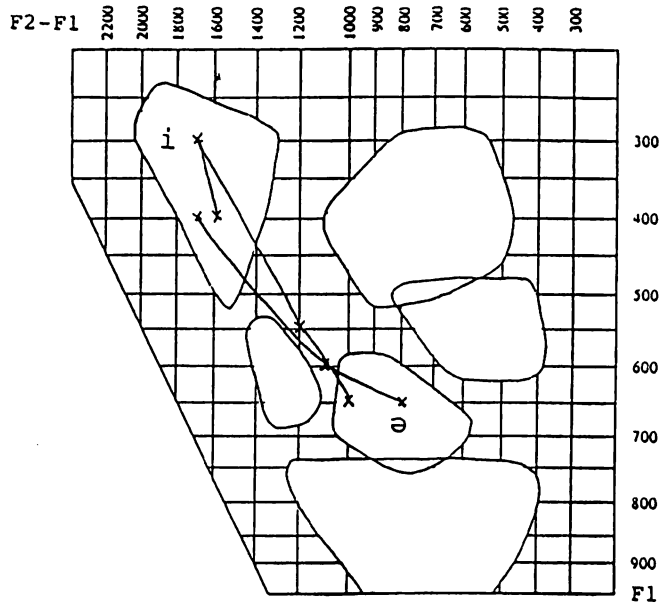


図2 nændərikəndəriji の母音

竹富方言の [ə] は [a] より高く発音されるということが測定で明白になったが、ə と a の区別は歴史的に母音の長さに起因するから、共時的にも相対的音長がその区別に関わっているかいないかをみてみる必要がある。(7)には掲載単語の語末音節 (CVi) の長さを列挙する。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| (7) mæi 米 0.268秒 | pæi 針 0.146秒 |
| mæi 米 0.245 | pæi 針 0.194 |
| mæi 米 0.300 | pæi 蠅 0.209 |
| | pæi 蠅 0.198 |
| mai 茶碗 0.154 | |
| ʔi:mai 飯茶碗 0.246 | pai 鋤 0.225 |
| ʔi:mai 飯茶碗 0.231 | kənəpai 鉄製鋤 0.179 |
| ʃu:mai 汁椀 0.234 | ki:pai 木製鋤 0.207 |
| kunumai 茶碗九杯 0.197 | |
| tu:mai 茶碗十杯 0.219 | |

-Cai と -Cəi との間に有意な差が認められないので、長さで区別されていないと言える。

4. 共時音韻的考察

形態音韻論的な過程のために、a～ə の交替が動詞の活用形及び数詞と助数詞の結合形にあられる。数量表現をいくつかみてみよう。

- (8) a. Φuta:rə (二匹) b. Φutəirə (二枚)
 me:rə (三匹) mi:rə (三枚)
 jo:rə (四匹) juirə (四枚)

(8a) の Φuta:rə (二匹) の分析は(9)の二つが考えられる。

- (9) a. /huta/ + /ara/
 b. /huta/ + /ərə/

(9a)は通時的な変化過程をそのまま共時文法に取り入れている分析で、ə を音素として認めない。一方、(9b)はə を音素として認定する立場であり、a>ə が歴史的な変化で、共時文法にないものになる。この立場を採ると、əə → a という共時規則を設けることになる。⁽¹³⁾この規則があるために、/ə/のほかに/a/という音素を想定する必要はない。すなわち、(9a、b)のどの分析を採っても、竹富島方言は五母音体系の言語となる。では、(9a) と (9b) とでは、どちらが正しい分析であろうか。

竹富島方言の [ə] は通時的に言えば、a が弱化してできた弱化母音である。弱化母音の ə は素性のない「空」の母音であると考えられる。すなわち、分節音の素性構造が削除されて、母音が弱化するというふうに解釈できる。また、弱化現象とは別に、個別言語の最も使用頻度が高い母音の素性が無標であるという案がある (Stemberger 1992)。琉球諸方言ではその母音は a である (金城1974 [1944]: 33; ローレンス1997) から、基底では琉球諸方言では /a/は素性の指定が全くないと考えられる。このような言語では、五母音の基底での素性指定は下記のようなになる。

	i	e	a	o	u
[高舌性]	+				+
[低舌性]		—		—	
[後舌性]	—	—			

多くの方言では、この素性のない母音に [+低舌性] という素性が付与され、音声的な [a] になる。しかし竹富島方言では [ə] が現れる分だけこの [+低舌性] 付与は他の方言より適

用範囲が狭い。では、無素性の ə はどのような環境において [+低舌性] 付与を受けるのであろうか。

(8a) の me:rə (三四)、jo:rə (四四) の派生を考えよう。「三」が/mi-/で、「四」が/ju-/であることは他の例 (例えば (8b) から明らかである。上の議論から (8a) の me:rə、jo:rə は/mi-/ + /ərə/、/ju-/ + /ərə/ に分解されることになるが、ə に素性がないから、i-ə → ee、u-ə → oo より i-a → ee、u-a → oo の方が素性の相互同化としてとらえられる自然な変化であると思われる。/miərə/ → miarə → [me:rə] と /juərə/ → juarə → [jo:rə] の派生が妥当と思われる。この二例から、母音の直後に位置する空の母音 (ə) に [+低舌性] が付与される(10)ようである。

$$(10) \quad V \rightarrow \begin{array}{c} V \\ | \\ [+低] \end{array} / V ___$$

(10)はそのままの形式化で長母音にも適用する。əə は(10)の適用で əa になり、そして、ua が同化して o:になると並行して、əa が a:になる。(ə に素性がないために、完全同化になる。) mai (お茶碗) (2、3) の共時的派生は(11)のように考えられる。

$$(11) \quad \begin{array}{cccc} C & V & V & V \\ | & | & | & | \\ m & & i & \end{array} \rightarrow \begin{array}{cccc} C & V & V & V \\ | & | & | & | \\ m & a & i & \end{array} \rightarrow \begin{array}{cccc} C & V & V & V \\ | & | & | & | \\ m & a & i & \end{array} \rightarrow \begin{array}{cccc} C & V & V & V \\ | & | & | & | \\ m & a & i & \end{array}$$

では、長母音の a: (4)はどうであらうか。2.2 節で m/b-消失は、k/g-消失と違って、共時過程であると論じた。m/b-消失が素性のみを削除する過程で、子音の位置指定を残すものであるとすれば、(12)の派生が考えられる。

$$(12) \quad \begin{array}{cccccc} C & V & C & V & C & C & V \\ | & | & | & | & | & | & | \\ n & m & N & d & & & \end{array} \rightarrow \begin{array}{cccccc} C & V & C & V & C & C & V \\ | & | & | & | & | & | & | \\ n & & N & d & & & \end{array}$$

m の痕跡である空の子音 (C) が残るために、(10)の適用が阻止され、無素性の母音は ə として発音されることになる。

以上の例は数詞と助数詞の結合であったが、動詞の活用形にも、əə → a の共時規則(10)を見出すことができる。(13)に ə ~ a の交替が見られるが、他の動詞との比較で a は語幹末の ə と活用接尾辞の頭母音の ə の融合体であることが分かる。

- (13) ko:dəi (抱く) ←/ko:də-i/
 ko:danu (抱かない) ←/ko:də-ənu/ (参考: burənu いない)
 ko:daritta (抱かれた) ←/ko:də-əri-ttə/ (参考: turəritta 取られた)

助詞的な性格の品詞にも -a があらわれる。語源的にこの -a が長母音に溯らないという点で、これまで扱ってきたような語形と成り立ちが違うと思われる。

-(t)ta～sita (過去)

səduritta (触った) çikkitta: (着いた) məkiŋjita (負けた) kətŋjita: (勝った)

-ja (命令)

sədurija (触りなさい) turəŋija: (渡しなさい) ŋindzirija (信じなさい)

-ja (問かけ)

çuttəiburija: (何人いるか) ŋi:rəriruŋkəja: (できるかな)

-da (問かけ)

çikərirunda (聞こえるか) no:rinda: (実っているか)

-na (よ)

kiŋkinnu ki: mirəruna: (時々来なさいよ)

上の例では、助詞はすべて -a(:) で終わっているが、(14) の例は、同じ動詞が文末にない時その母音は ə であらわれることを示す。この例は竹富島玻座間出身・在住の亀井ナツ氏 (大正2年生まれ) から得られた語形である。

- (14) çikkitta: (着いた) çikkittəkəja: (着いたかな)
 nəritta: (出来た) nərittəda: (出来たか)
 səduritta (触った) sədurittəda: (触ったか)
 turəŋija: (よこしなさい) turəŋijəna: (よこしなさいよ)

これらの助詞は基本的に -Cə で、文末長音化を受けて -Ca になったと思われる。この文末長音化はもとはイントネーションに関連する音声的な長音化であったろうものが、そのうちに音韻過程になったものであろう。⁽¹⁴⁾

5. 結 論

竹富島方言には、音声的な [a] のほかに、音声的な [ə] があり、この違いで意味が区別

される最小対がいくつもある(2)。が、最小対の存在は必ずしも音素の認定に直接つながるわけではない。例えば、共通語の satsu (札)/ʃatsu (シャツ) という最小対は s と ʃ が別の音素であることの証明にはならない。本稿では、竹富方言の ə と a が同一音素に属し、/ə/ が基本で、[a] はある特定の環境(母音の直後)において /ə/ の異音として現れると論じた。⁽¹⁵⁾ さらに、使用頻度や実際の発音から、竹富方言の ə は素性のない母音であることをも提案した。

本稿はわずかに三人の話者の方言資料に基づく素描である。そのために、すべての竹富方言話者に本稿でみてきたような a/ə の分布があるという証拠にはならない。しかし、辻(1991)と河上親雄の a/ə の分布が相似しているのも、一つの典型であると考えられよう。第1節の(1)が示すように、國學院大學日本文化研究所(1990)はこの典型に合わないようであるが、これは、複数(十人)の話者の発音を利用しているから、本稿で解明した分布の話者と、a/ə の区別がない話者のデータが混合していることから生じた可能性があると思われる。個人差がある現象の場合、話者ごとのデータを分けて扱わないと、実在しない「平均化」された言語体系の記述になる虞が生じる。本研究では、なるべく呈する資料が平均化されないように努めた。

註

⁽¹⁾ 久野真(私信)によれば、大野(1990a,b)の表記はある意味で音韻表記であるから、全部 a に統一して書いているということである。でも、s と ʃ、dz と dʒ、ç と ʧ などを書き分けているから、音韻表記にしては特異である。

⁽²⁾ 久野真(1990)はこの i-a が融合した母音を e: で表示している。また、久野真(私信)は、この ə: が間違いである可能性を指摘し、i で終わる名詞に「は」が続くと e: となることを確認している。

⁽³⁾ (1)は、久野(1990: 26-47)の7、8節の全語彙(重複語は一度だけ)、辻(1991)は三ページ目から数えて十ページごと、計29頁(方言集の全語彙のおおよそ一割)の語彙からすべての a と ə を拾って、集計したものである。

⁽⁴⁾ 名嘉真(1992: 303)によると、鼻母音のない話者もいる。

⁽⁵⁾ 例えば鳩間方言 ai (藍)、agi (口蓋)、kai (粥、衣装箱)、mai (米)、kata (ばった)、paisa (早く)、pinaruN (減る)、ssaruN (腐る)。

⁽⁶⁾ 以下の「石、新、波、与、鳩、宮」はそれぞれ「石垣(四箇)、新城、波照間、与那国、鳩間、宮良」の方言形で、音韻表記である。(与/-k-/ = [-g-]、/-g-/ = [-ŋ-])

以下、再構形も音韻表記である。

⁽⁷⁾ Φuu- (大) < *uhu- < *upu- も並行に起こった変化であろう。

⁽⁸⁾ Ca の一モーラ語が複合名詞に入った時に a/ə の両方の発音で現れるものがあるが、これは他方言の母音の長さに対応している。

竹富	鳩間
[a(:)]	[a:]
ʃa:buN きゅうす、湯呑茶碗等のお盆	saabuN 茶盆
ʃauki お茶漬け	saahuki
ʃatto 仏前に供えるお茶	saadoo
[ə]	[a]
ʃəbəN 湯呑茶碗	sabaN

⁽⁹⁾ 石垣方言の**hazīmaruN*という語形を載せた経緯について説明する。初稿には *hazimaruN* という形にしていたのであるが、本誌の査読者から、石垣方言の *hazimaruN* は「明らかに誤りと思われる形式」であり、「*hazīmaruN* とすべき」という指摘があったので、不本意ながら *hazīmaruN* にした。先行研究では以下のようになっている。

宮良當壮 (1980 [1930] :455) パジマルン [*paz'imarug*] 始る

平山輝男ほか (1967:395) /*hazimiN*/ [*hadʒimiŋ*] 始める

宮良安彦 (1992) 「石垣方言」『国文学解釈と鑑賞』724号47頁/*hazimiti*^(ママ)/始めて

宮良信詳 (1995) 『南琉球八重山石垣方言の文法』110頁 -*hadʒimiruN* 始める

宮城信勇 (近刊) 『石垣方言辞典 (仮称)』ハジマルン *hadʒimarug* 始まる

母語話者である宮良當壮と宮城信勇が二人とも「明らかに誤りと思われる形式」を使っているとは考えにくいから、言語研究者である査読者のこの語形に*を付したのである。

⁽¹⁰⁾ 同じ代償長音化でも、*pjaŋgəri* (引潮で船が上がった感じ) では *Cjæ* ではなく、*Cjaa* (短母音化で *Cja*) になった。このことから、この単語の歴史的成立の方が *a>ə* より古いことがわかる。

⁽¹¹⁾ 米国の Summer Institute of Linguistics 製。利用したサンプリング周波数は19500Hz。

⁽¹²⁾ 図1は、*i(:)*25個、*u(:)*21個、*e:*4個、*o(:)*9個、*ə(:)*23個、*a(:)*19個の測定結果をまとめたものである。

⁽¹³⁾ *əə* → *a* は *m/b* → *ɸ* の前に順序付けなければならない。

⁽¹⁴⁾ 禁止の *·nə* は**·na* にならないようである。

(i) *ku:nə* 来るな (河上親雄氏)

ko:dənə 抱くな (亀井ナツ氏)

⁽¹⁵⁾ 基本的には音声的な [ə] と [a] の分布は音韻的な母音の長さ (/ə/と/əə/) の違いに起因することになる。でも、アクセントとの関係ははたしてないのであろうか。(i)で音調付きの語形(音声表記。発音は河上親雄氏による)をいくつか掲げるが、これだけの例から [a] と [ə] の分布はその拍の高低に関係なくあらわれることが分かる。

(i) *çitumaī* 一椀 *çitusəṛə* 一皿
Φūtəmaī 二椀 *kəbirə* 蝶

[a] と [ə] の分布が母音の長さに対応するのであれば、音調との相関がないのは当然のことであろう。

謝 辞

この研究をなすにあたり、多くの方々にお世話になった。狩俣繁久先生（琉球大学）は『竹富島方言集』の存在を知らせて下さり、辻弘氏は在庫切れになっていたその方言集を探し出して、送って下さった。河上親雄氏は聞き取り調査に快く協力して、1996年8月8、9、10日の三日間、竹富島のことと生活について教えて下さった。さらに1998年8月18日に、河上親雄氏と亀井ナツ氏を相手に補充調査を行った。加治工真市先生（沖縄県立芸術大学）は拙稿を草稿の段階で読んで、特に語源について寄与するところは大きかった。久野眞先生（高知大学）と高垣哲生先生（オークランド大学）には本稿を読んでいただき、貴重な御教示をいただいた。以上の方々に心からお礼申し上げる。

尚、補充調査は、国際交流基金の援助を得て行われた。

参考文献

- 上勢頭亨（1976）『竹富島誌 民話・民俗篇』法政大学出版局
- 大野眞男（1991a）「音対応と音変化」國學院大學日本文化研究所編（1990）所収 49-76.
- 大野眞男（1990b）「竹富島の昔話」國學院大學日本文化研究所編（1990）所収 137-141.
- 加治工真市（1995）「竹富方言鼻音の音韻論的解釈について」『沖縄県八重山の総合的研究』科研中間報告書 94-5. 法政大学沖縄文化研究所
- 加治工真市（1996）「竹富方言音韻の問題点」『音声学会会報』第202号 16-25.
- 加治工真市（1997）「琉球・竹富島方言の基礎語彙一分野1、天地、気候の部」『琉球の方言』21号 122-35.
- 加治工真市（1998）「琉球・竹富島方言の基礎語彙一分野2、動物」『琉球の方言』22号 136-48.
- 金城朝永（1974 [1944]）「那覇方言概説」『金城朝永全集 上巻』所収 3-150. 沖縄タイムス社
- 久野 眞（1990）「竹富島方言の音韻体系」國學院大學日本文化研究所編（1990）所収 3-48.
- 久野マリ子（1990）「アクセント」國學院大學日本文化研究所（1990）所収 77-116.
- 國學院大學日本文化研究所編（1990）『琉球竹富島の方言』國學院大學日本文化研究所
- 古瀬順一・小島典子（1993）「竹富島方言の研究—音韻・アクセントを中心に—〔I〕」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会学編』第42巻 187-215.
- 古瀬順一・小島典子（1994）「竹富島方言の研究—音韻・アクセントを中心に—〔II〕」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会学編』第43巻 57-79.
- 杉村孝夫（1990）「動詞・形容詞の活用」國學院大學日本文化研究所編（1990）所収 117-135.
- 辻 弘（1991）『竹富島方言集』私家版
- 名嘉真三成（1992）『琉球方言の古層』第一書房
- 中松竹雄（1987）『琉球方言辞典』那覇出版社
- 中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版
- 中本正智（1981）『図説琉球語辞典』金鶏社
- 野原三義（1986）『琉球方言助詞の研究』武蔵野書院
- 服部四郎（1951）『音聲學』岩波書店

- 平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 宮良當壮（1980 [1930]）『八重山語彙』第一書房
- ローレンス・ウェイン（1997）「石垣（四箇）方言の動詞活用と母音素性の不完全指定」第3回沖縄
研究国際シンポジウム シドニー大会
- Stemberger, Joseph P. (1992) "Vocalic underspecification in English language production,"
Language 68:3. 492-524.